



— 教師になったきっかけは？

「実は、教師はなりたくない仕事ナンバーワンでした。しかしある時、なぜ教育は大事なのか、そしてビジネスとしても、なぜこれほど教育のため

に皆お金を使うのだろうか、と思い始めました。その時に、結局現場を知らないと分かるはずがない、だから現場を知りたい、そう思うようになり、社会人になって会社に務めながら夜間の学校に通い、教員の資格をとりました。その後パースでは、運命に導かれるように今の仕事に就いています」

— 学校では、どのようなことを教えていますか？

「担任としてクラスも持っていますが、第二外国語としての日本語も教え、読み書きや文法全般を教えています」

— 海外での日本語教育とは？

「言葉というのは文化なので、伝統や生活習慣を背景に、日本人の考え方はどういったものに基づいているか、それは

日豪のよりよい関係を築く礎に

どういった歴史や地理条件があってそう考えるようになったか、そこまで含めて教えています。言葉は、言葉自体を覚えるだけでは意味がないと思います。言葉を使ってその国の文化を知り、自分の文化も知ってもらうこと、お互いに相互理解をすること、それが何よりも大切だと思います」

— 教育現場でのご自身が心がけていることは？

「自分が日本人の代表だとは思ってませんが、自分が過ちを犯した時“アイツは駄目だ”ではなく“日本人は駄目だ”と言われることだけは、絶対に我慢できません。祖国を遠く離れているからこそ、日本人としての自覚を持たなければならぬと思っています」

— 現在の『志』は、どのようなものを抱かれていますか？

「自分の生徒たちが言葉だけではなく、本当の意味で日本とオーストラリアの2つの文化について敬意をもって理解し、日豪の良い関係を築く礎となってくれることが教師としての願いです。オーストラリア人がもっと日本のことを知れば、お互いに良い関係ができるはずで。今、私が関わっている教育、特に日本語教育が将来、そのために役立てば何よりだと思います」



ふくもと ちはる
福本 智晴さん (43)

パースの現地校教師として、特に日本語教育に携わる傍ら、パース補習授業校の校長代理も務める。また、剣道クラブも主宰する。

14TH ANNIVERSARY パースエクスプレス創刊14周年記念号 パースへの初志

— オーストラリアではいつサッカーを始められたのですか？

「最初は友達とボールを蹴る程度でしたが、永住権が取れて一段落した時期に、今の所属クラブであるフリーマントル・ユナイテッドに入りました」

— クラブに入るためにテストのようなものはありますか？

「細かい選考はありませんが、ランニングなどのトライアルはあります。トライアルが始まる頃は80人くらいいますが、最初の4週間ほどはかなり走り込むので、シーズンが始まる頃になると40人くらいに減ってしまいます」

— 日本人としてプレイして、苦労したことはありますか？

「日本人というよりもアジア人ということで苦労しました。皆がみんな、アジア人に慣れてはいないので、最初はパスすら回ってきませんでした。でも、シーズンが終る頃には良い仲間になっていました」

— 楽しむためのサッカー？ 勝つためのサッカー？

「始めた時は、サッカーを楽しみたいという気持ちが強かったです。ですが、試合をするからには勝ちにもこだわり、大会に出るなら、優勝したいと思います」

— サッカーを通して得たものは？

「一番は仲間が増えたこと。あとは、その仲間での優勝の喜び

サッカーをライフワークに

を知ったことです」

— 今のご自身の『志』は？

「サッカーでお金をもらえるよう、もっと上のリーグでのプレイを目指していた時期もありました。ですが、自分はサッカー選手としてのピークは、もしかしたらもう過ぎていくかもしれません。そんな中、自分よりも年上で、まだまだしっかりサッカーをやっている人たちを見てみると、そういう人たちを目標に自分もサッカーをずっとやり続けたい、と思わずにはいられません。いろんなことにチャレンジすることは良いことだと思います。チャレンジをするために努力したことは、必ず糧になるものだと思います。“継続は力なり”という言葉があるように、何事も続けることに意味があると思います。だから、できればライフワークとして50歳60歳までサッカーを続けたいと思います」



ひろせ みつよし
廣瀬 光祥さん (40)

フリーマントルという町に惹かれ、オーストラリアに永住。現地会社で働きながら、ライフワークとして地元のクラブチームでサッカーを続ける。